
アトシープ

萩野 晴哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アトシープ

【Nコード】

N8135V

【作者名】

萩野 晴哉

【あらすじ】

《アトシープ》

それは、瞳に宿る能力（Ability to stay in pupil）の総称。

本来とは違う目の色を表し、解明できない力とされている。

望まなくとして手に入れてしまった彼らは何をするのか、何を起こすのか。

巡る物語はついに目を覚ました

第一篇—P r o l o g u e—

—P r o l o g u e—

西暦2XXX年。平成の世が終わり早幾年。

この科学と医学に特化した国には、解明できていない異能の力があるとされていた。

その名も《アトシープ》

明かされている特徴は、それが持つ秘めたる能力を使役するとき、本来産まれて持つものとは全く瞳の色が異なり浮かび上がるということ。

その能力は突然目覚めたり、血縁として受け継がれて持っていたりする。

《アトシープ》は決められたとでも言うかのように、その手にした人物以外奪うことも使役することもできない。

また、仮に成功したとしても拒絶反応が起こり死に至ること。

数は未だ不明。

ということだけだった。

また、それは保有者同士無意識に引き寄せられる傾向があるようで、幾百年も昔、とある学園にいた《アトシープ》を持つ者達が集ったという。それは、人か動物かはたまた人ならざる者なのか。

記されている書物には詳しく書かれてはいない。

そして、舞台は地図で見る限りは狭いとされる国内で、唯一と言われているもおかしくない程の膨大な敷地保有を誇るとある学園。国内、と言えどもそこは本土から離れた人工の島。住んでいるのはその学生、教職員計二万人の人間。所有面積は校舎を含めおよそ二百万平方k m。

学問、身体能力、武術、才能、運……何かに特化していようがまいが、奇跡でとも言われる希望者のくじ引きでここは入れる。必要学費は普通の私立学校から公立高校の間とされる。

学園の名は郁聖学園。^{イクセイ}

正式名称、国立大学専門学校附属郁聖学園。幼稚部から大学部まであり、ただの進学校ではなく就職にも適した正に、夢のような学校だ。

この学園は先程示した通り、くじ引きで行われるために、神童と呼ばれる様な秀才から生粋の馬鹿な不良まで幅広く色々な生徒が通っている。勿論、全寮制だ。

この舞台での物語のメインは主に中等部に向けられる。

何故ならば、幾百年に集った《アトシープ》はここ、郁聖学園中部生徒会及びそれと肩を並べる専門委員会から名を響かせたとこの古典に示されている。

生徒会役員は、一名ずつの庶務、会計、書記に、副会長二名、会長一名の六人。

専門委員会は、美化、体育、保健、風紀、図書、代表の六委員会。各委員長、役員すらもくじ引きで決められ、就いてしまったものは途中辞退を求めることはできない。

委員だけは半年の交代制としている。

辞退があるとすれば、解散宣言を言い渡されるか、小等部から中等部、中等部から高等部、などという区切れを迎えるしかないと思われる。

この物語の者達は、今正に区切れを迎えた年にいる者ばかりだ。

要するに、くじ運悪く一年生にして二年生にしてその強制任命に当たった者達ばかりの話だ。

さあ、物語はもう始まっている。置いていかれぬように今すぐ寄っていくといい。

ん？私は誰だって。

そんなことはどうでもいい。……いや、そうだな……「郁聖学園」を見守る《アトシップ》とでも言っておこうか。
本気になるな、冗談だ。

さあ、物語の扉を開け。

そうだ、最後に一つ。

私が誰だかなんて探ろうとしても無駄だ。

私は、幾百年も昔に《アトシップ》と共に命を亡くしたからな。

彼らも、そうならないよう君が見ていてくれ。

それでは、またどこかで会おう。

第一章：二度目の出会い―1（前書き）

――彼女は言いました。

「君”は誰？

何のためにいるの？

何で私なの？」

”彼”は答えました。

『それは”貴方”が望んだからさ』

そして、こう続けたのです。

深い深い意識の底という闇の中で囁くように。
耳に吹き込むように。

『いつか判る時が来る』

そう”彼”は言うと静かに消えました。

唯一人彼女を残して…………

第一章：二度目の出逢い | 1

【第一章：二度目の出逢い】

春。

国立大学専門学校付属郁聖学園の春は桜が舞う。

何百本と植えられた木の中で六割以上が桜の木とされている。一番数が多いのは染井吉野と言われる幅広く生息する木だ。薄いピンク色にやや大きめの花を枝いっぱいに広げる花は見慣れたものである。他にも寒緋桜と言う花の色が濃く、下向きやぱつと大きく開かないものや、常識的に考えて有り得ない高嶺桜や千本桜まで生息する。桜以外にも梅や松、銀杏にモミ、竹など数多くの木々がはびこり、学園内は年中様々な色に染まるのだ。

そんな中で春風が吹けば、花びらは舞うので目を奪われてしまうのは、何年もここに通っていると言うのに慣れないものである。

淡いピンクに彩られた道を歩いていけば他にはない綺麗な校舎が目に入ってきた。

のんびりと景色を眺め歩いてた少年は歩くにつれて少なくなってきた木を見れば辺りを見渡していく。ぱつと、視界の端に水色を捕らえれば気付かれないように近付いた。少し長めの髪を水色に染めてある少年はどうやら茶色の書店目印が入るブックカバーをつけた文庫本を読んでいるようだ。太い幹に身体を預け黙々と読み続けている。

指定ネクタイはせずに紺色のベストの下はカッターシャツ、ボタンは二番まで開け、スラックスを余らせずスタイルの良さげな彼は整った顔を微動だにせずにページを送った。少し伏せた目は色素が薄

いのか茶色を称えており、また、左目を隠すように前髪が長く伸ばされている。時折小さく息を吐く様は静寂の中に儚さを感じ、その姿を見た女子達は彼について話に花を咲かせた。

「ねえ、かつこよくない？あの人」「何年生かな」「彼女いないといいのに！」「声かけてみる？」「いいかも！」「アドレスとか聞きたいなあ」「こっち見てほしいかも」

数人の女子はちらちらと少年の様子を伺っているようで、どうやら何かキツカケを探しているみたいである。

少年といえば聞こえていないのか、無視をしているのか、文庫本から目を話さずにじいっと逸らさずに文字を目で追っている。

それをずっと見ていた男子は、待ち合わせをする相手だけに全く面白く感じない。短めの銀髪に花びらが絡まるのも気にせず、いや気付かずにそろりと近付いていく。元々脅かす気でいたので、更に驚かしてやろう。八つ当たりになってしまいが、そんなのは関係ない。

自分を差し置いて女の子に持てようなんざあいつの癖に生意気だ！銀髪は心の中で叫べば、彼が背もたれる木の後ろへと回り、静かに腕を伸ばした。女子も気付かなければ、水髪も気付かない。

伸ばした両手を腰に当てれば一息吐く間もなく手をわきわきと動かし数秒操りあげた。

「ひっ！？や、やめ：あ、う」

「ゆーうーきーくーん、待ったー？」

「み、ぞれ、貴様：つくう：」

「あははははは、ええ反応だな、毅」

操りをしかけた銀髪は笑いながら尚もしつこく水髪を攻め立てる。その間に少しずつ彼を狙っていた女子生徒は離れていった。ぼそぼそと、えっそういう関係なの！？等と声まで聞こえる。

それに気付けば、自分までもが引かれる対象になると言うことによ
うやく思い至ったらしく、慌てて「ちゃう！ミーとあいつはそない
な関係や……」と言い訳するも女子の誤解等そう解けるものではな
い。

特に有り得ない性癖や展開を一度自己解釈してしまえば、それはた
った数十秒の間に解ける訳がないのだ。

現に銀髪の言葉に彼女らは全く耳を貸さないというか聞く耳を持た
ずというか、

「やだ、あんなかつこいいのに！」「あれじゃ奪えないよー」「男
役の方だったら、」「絶対無理だって！」「そんなー……」

といった感じで、ただの悪戯をそういう関係だと誤解してしまっ
ている。

仮に見る見られる相手が男子同士や女子同士だったらそんなことは
なかったかもしれない。

誤解も解けぬまま彼女らが去ってしまったえば、その場には慥りに笑い
疲れて息を整える音と、肩をふるふると震えさせながら拳を握る姿
が残された。

「殺！あんたんせいでミーの”ドキドキ・彼女とハッピースクール
ライフ”計画が見事シッパイしたやないか！！」

「それはこちらのセリフだ。誰かさんが一緒に登校したいと言うか
ら待っていたと言うのに、何だあの仕打ちは。恩を仇で返すを地で
言ってるな本当に。お陰で読んでいた本のページはわからなくなる
し、要らん誤解はされるし」

「そないなの、女の子にちやほやと影で囁かれるあんたが悪い！」

「それこそ知るか。女を落としたいならどこぞの女たらしにでも聞
け」

「聞いたって意味ないやろ！頭良くてスポーツ出来て料理裁縫洗濯
にイケメンなんて持てへん方が変やないか！！」

ゼーはーゼーはーと收拾のつかない話が続く。勢いで言葉を捲し立てている銀髪はこの度、不運にも生徒会執行部役員職の一つ書記のくじを引いてしまった狼崎^{ロウザキミツレ}。癖のかかった銀髪は短いと言えど前髪は眉から額の真ん中辺り、後ろ髪は学ランの詰襟に当たる程度の長さだ。上着の下はフード付きパーカーを日別に色違いで着用しており、白のときもあれば黒いときもあるらしい。

彼の服装を見ればわかるのだがこの学園は割と校則に緩く、黒ベースに深緑の学ランか、暗めの紺のブレザーの二種類がある。

女子も同じく、学ランと同色のセーラー服か、ブレザーか。これに至ってはスカートはヒダ折りや箱折りなど好きなものを着用が出来る。

校章は学年のカラー別に胸ポケットに金属製の物を付けなければならない。アレルギー体質は、特注で販売をしてくれるらしい。

「僻みがましい奴は一生持てないだろうな」

「んや!？」

「それと貴様はヘタレだしな。余計持てないに決まっている」

「ヘタレなら陽くんもいるやないか!」

「あれは確かにそうだが、容姿や性格、口調と合っているから女子からはマスコットの人気だぞ。あとは家柄だろうな。この学園の経営を片棒担ぐ名門家の跡取りだからと言うのも狙いの一つだと思うが」

「……家系まで来まっしょろか。そうやろか。ええ、そないなこと……ミーには一生無理やないか!!!!!!」どこの世界のマンガの主人公やあいつら!!」

「……………(そういうところが一番持てないと気付かないのか)」

割と淡々と毒舌口調気味な方は結城毅^{ユウキツヨシ}。狼崎と同じくくじ引きにより、この今の生徒会執行部役員職の中で一番めんどくさいとされる副会長の席に身を置いている。去年は彼と違い、独立専門委員会の

一つの代表委員会の一員として活動していた。

独立専門委員会とは、その名の通りで普通は生徒会の下に委員会が直属として属しているもののだが、この学園では委員会は生徒会の下に就かず、それと同等の権限を持つことが許されている。

ただし、くじ引きによって決まるせいにか、委員会の中には生徒会の味方をしたりする者も稀にいるらしい、稀に。

今年度の生徒会も幾人かは委員会として活動していた時期があるので、もしかしたらそういうことが起きるかもしれない。

話の切れ目で、狼崎が怒りと醜い嫉妬にわなわなと拳を握ってれば、そのつむじに何かが勢いよく落とされた。

よく見ればそれは、下ろし立てであろう傷一つないクリアファイルの角であり、それを手にするは先程関係を誤解をされた片割れでもある結城だった。そのまま冷たい目で彼を見ている。

否、冷たい所か目線で人を殺せるのではないかというくらい、真っ直ぐに、冷徹に、狼崎を見ている。デビューしたての不良など、1秒にも充たない速さで逃げていきそうだ。

「痛っ！何すんだよ殺し！」

「……………貴様」

「…っ、何？」

「人に吐き気のする誤解を作り上げておいて、まさか何も言うことはないというのか？」

「……………へ？」

「もう一度言う、何か言うことはないのか？」

「いや……………あれは、ミーも被害者…」

「……………」

——ドゴッ

桜と、風と、彼ら二人しかないこの周りで、鈍い音が響く。ジャリッと大地を踏み鳴らすのを足の裏で結城が作り出した後には、もう狼崎の頭——否、顔面が地に伏せていた。

肩を、指を鳴らして握り、また開けば無造作にスラックスのポケットへと突っ込む。

風が彼の前髪を揺らす、その下の残酷さを見られる者は誰もいない為か、放置をし、そのまま軽くあげた足を彼の頭に叩き付けた。ガツツと頭部と靴裏の音が聞こえる。

下ろした足は時間が経つにつれて少しずつ力が足されていった。

最初はピクピクと体を震わせていた狼崎だったが、ずっと地面とキスをする形で口や鼻を塞がれてしまえば息ができない。

降参を申し出たいのか、精一杯腕を動かして地面を叩き始めた。

その様子を見た結城は足を狼崎の上から退ける。解放され顔をあげることを許された狼崎の顔は土まみれだった。それも、かなりの間抜け顔である。

深く息を整える彼に結城は先程よりも冷徹に——まるで虫けらを見るかのように——彼を見据えていた。

なんとも冷たい目線なのだろうか。

反論したくとも、殺しそうな瞳で見つめられれば何も言えないのか、口を開きはしたものの、音もなく、ただ、ただ、開閉しただけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8135v/>

アトシープ

2011年10月10日12時06分発行